

日常会話におけるあいづち表現

「なるほど」と「たしかに」の比較

傳研究室 18L1033Z 後町芳輝

1. はじめに

日常会話において、聞き手のあいづちはその会話の内容や発話者の表現方法などに左右されるものである。あいづちの表現方法には様々な種類が存在し、頷き、笑う場面や、また実際に言語情報としてなにか言い返す場面などある。その中でも、「なるほど」や「たしかに」のように似た表現ではあるが会話中の内容や表現の小さな違いにより、選択される単語が変わってくるものがある。

メイナード (1993) は、「あいづちとは話し手が発話権を行使している間に聞き手が送る短い表現（非言語行動を含む）で、短い表現のうち話し手が順番を譲ったとみなされる反応を示したものは、あいづちとしない」と定義している。蓮沼 (2018) は、『「なるほど」は新情報を自分の知識の中に位置づけ話者における納得を明示するものである。したがって、先行する発話は基本的に認識表明や情報の伝達を担う平叙文が使用されると考えられる』と述べている。また「なるほど」と「たしかに」の先行発話を①認識表明、②情報提供、③確認要求の3つに分類した。望月 (2015) では、「なるほど」は単独度が高く、「たしかに」は単独度や修飾度に「揺れ」が見られた。このことから『「なるほど」が既に陳述副詞から感動詞としての単独用法への変化を遂げているが、「たしかに」はその変化の途中にあるからだ』と述べている。

本研究では、「なるほど」が産出される文脈の前後関係を同じ語彙的応答である「たしかに」に着目することで他のあいづち表現にはない「なるほど」自体の性質をより明確化することを目的とする。

2. 分析 1

2.1. 目的

「なるほど」と「たしかに」の性質を調べるためには、まず「なるほど」と「たしかに」がどのような状況で話されるか知る必要がある。どのような先行文脈で「なるほど」と「たしかに」が選択されるか調べることを目的とする。

2.2. 方法

データ：

『日本語会話コーパス』（モニター公開版）のうち、「なるほど」と「たしかに」両方を発した参加者 28 名が発した「なるほど」86 データ、「たしかに」71 データを使用した。
手続き：

アノテーションソフト ELAN を用いて、「なるほど」と「たしかに」とその先行文脈の部分を抜き出しラベリングをした。この際、話題の最初に来る発話を言語要因として、「意見」「説明」「質問」の 3 つに発話の特徴を当てはめた。「意見」は個人的な意見が発端で始まった話題、「説明」はあることに関して情報を伝えている話題とし、「質問」は第一話者が質問や疑問を投げかけて始まった話題とした。「なるほど」と「たしかに」の先行発話に関しては蓮沼（2018）と同様、「認識表明」「情報提供」「確認要求」の 3 つに分類した。なお、「質問」で始まる話題では、話題開始者と「なるほど」「たしかに」の話者（以下、反応者とする）が同一人物のデータを、「意見」「説明」で始まる話題では、話題開始者と先行発話者が同一人物のデータを扱った。

2.3. 結果と考察

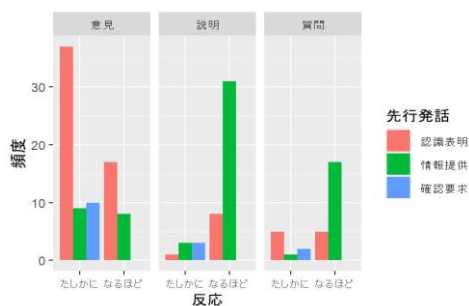


図 1. 話題開始時と先行発話の機能

「なるほど」の分析結果に関しては、「説明」の中でも先行発話が「情報提供」の場合多くみられた（図 1 参照）。これは知らない情報を聞いたときに自己や相手に対して納得を示しているのだと考えられる。それに対して「たしかに」では、「意見」が最も多く集中していた。中でも先行発話が「認識表明」の「たしかに」が多かった。これは同じ納得表現でも相手の考えに納得、同意を示す表現として話者は「たしかに」を用いているのだと考える。

3. 分析 2

3.1. 目的

「なるほど」「たしかに」の後続発話を調べることで、「なるほど」と「たしかに」が相槌としてどのような役割を持っているのか、また話題の継続性があるか調べることを目的とする。

3.2. 方法

データ：

『日本語会話コーパス』（モニター公開版）のうち、「なるほど」と「たしかに」いずれかを発した参加者 63 名が発した「なるほど」158 データ、「たしかに」76 データを使用した。

手続き：

アノテーションソフト ELAN を用いて、産出したデータの中で話題始めの発話と「なるほど」「たしかに」とその後続発話の部分を抜き出しラベリングをした。ここで話題開始者・

反応者・後続発話者それぞれの話者の違いを観察した。この際、「なるほど」「たしかに」の発話後のポーズが 1.5 秒以上、また後続発話から話題転換されているデータを「後続発話なし」と定義した。そして、話題の違いによる後続発話の違い・特徴を調べるため、「意見」「説明」「質問」それぞれの話題ごとに①話題開始者と後続発話者が同一かどうか②反応者と後続発話者が同一かどうか調べた。

3.3. 結果と考察

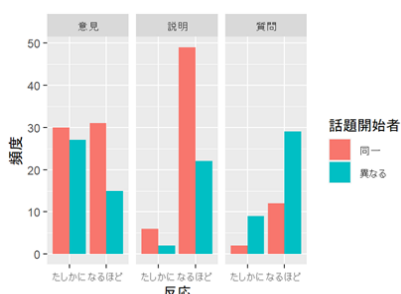


図 2. 話題開始者から後続発話者への話者移行頻度

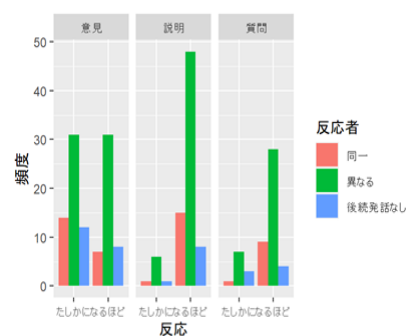


図 3. 反応者から後続発話者への話者移行頻度

①話題開始者と後続発話者についてである（図 2 参照）。「意見」「説明」では同一、「質問」では異なるが多く占めていたが、話題開始者が両相槌を聞いても話題を継続すること多いことがわかった。しかし「意見」では「たしかに」の場合、話者が同一の場合と異なる場合の頻度が同数程度であった。これは「たしかに」が起点となって話者が切り替わっているのではないかと、また話し手の意見に対する補足・判断支持として、他の話題の場合の「たしかに」よりも後続発話が発せられやすいと考える。

次に②反応者と後続発話者についてである（図 3 参照）。最初に各話題で「なるほど」「たしかに」両相槌とも反応者と後続発話者が異なる場合が多く占めていたことについて触れる。単独用法の相槌として「なるほど」「たしかに」を用いる場合、用いる聞き手はこの一単語で自分のターンを終了させる意図で発話していると言える。発話者はその意図を汲んで、「なるほど」「たしかに」を相槌として認識して、後続発話を自然に発しているのだろう。しかし、望月（2015）より「たしかに」に関しては、副詞の非単独用法から感動詞の単独用法として使われつつある流れになっている。

この流れのため、今回「たしかに」の方が「なるほど」よりも全体的に「後続発話なし」となるデータが多く見られたのだろう。なおかつ反応者は「たしかに」を単独用法として使用したために、話し手と聞き手に認識の相違が起きて、「後続発話なし」となったとも考えられる。

4. 分析 3

4.1. 目的

「なるほど」「たしかに」の発話後のポーズ（以下、反応後ポーズとする）を加えて調べることによって、話者移行に関わる原因を明らかにすることを目的とする。

4.2. 方法

データ：分析 2 同様

手続き：

分析 2 で使用したデータをもとに、「なるほど」「たしかに」と後続発話との間のポーズを反応後ポーズとして計測した。集計したものをグラフ化し、反応者と後続発話者が同一かどうか場合分けして表した。なおこの際、「説明」「質問」では「なるほど」と「たしかに」でデータ数の差が大きかったため観察する話題を「意見」に限定した。

4.3. 結果と考察

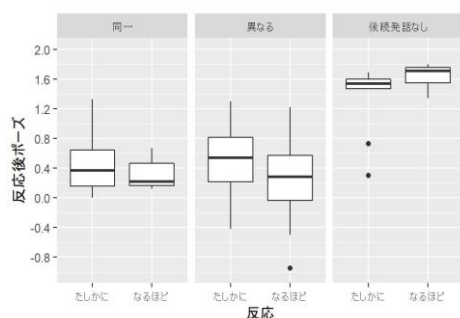


図 4. 反応ごとの反応後ポーズ (s) の分布 — 反応者・後続発話者の話者移行の観点から —

「意見」の反応者と後続発話者が同一かどうか踏まえて両相槌の反応後ポーズを分析した結果である (図 4 参照)。まず話者が同一である条件では「なるほど」のデータのばらつきが小さく、ポーズ長は短かった。このことから、「なるほど」の場合、独立用法として確立しているため、発話後スムーズに次発話へと移行できるのではないかと考える。次に話者が異なる場合、「なるほど」と「たしかに」両相槌ともデータにばらつきが見られた。また、「たしかに」は反応後ポーズ長がより長かった。蓮沼 (2015) より「たしかに」は単独用法と非単独用法

で揺れが生じており「たしかに」発話後、受け手によっては非単独用法と捉えてもう一発話あると感じ反応後ポーズ長が長くなっているのかもしれない。

5. 総合考察

「なるほど」と「たしかに」の文脈からでも使い分けがされていることが分かった。使われている文脈から「なるほど」は話し手が情報を提示することに重きを置いた話題、「たしかに」は話し手の考えを伝えることに重きを置いた話題の時に使われやすいと言える。そのため、「なるほど」は納得・賛同、「たしかに」は共感・判断の支持の特性をより持っていると考えられる。

話者移行については「たしかに」は「後続発話なし」が多かったり、後続発話者に第 3 者が入ることがあったりと用法が確立していないが故の、話者の移行に揺れが見られることがあることが分かった。反応後ポーズ長に関しては「なるほど」は短く、「たしかに」は長いことがわかった。話者移行も含めて考えると、「なるほど」と「たしかに」の単独・非単独用法の確立の違いから文脈やポーズ長に違いが生じているのではないかと考える。